

第53章

モロナイ1-6章

はじめに

モロナイはヤレド人の歴史を短くまとめ終えた後（エテル13:1; 15:34 参照）、自分が生き延びてさらに記録を書き記すことはないだろうと思っていた（モロナイ1章参照）。しかし、レーマン人とニーファイ人の最後の戦いの後、モロナイはさらに36年間生きた（モルモン6:5; モロナイ10:1 参照）。この間、モロナイは末日の読者にとって価値のある神聖な真理を書き加えた。そこには数々の儀式、特に聖餐の正しい執行の方法や、日々教会を管理する際の聖霊の役割に関する指針が含まれているため、これらの章はわたしたちにとって特に有益なものである。モロナイはまた、教会員は教会に入る新会員を見守り、養う必要があることを強調した。

注解

モロナイ1:1-3 モロナイ

• 主はモロナイに「エフライムの木の記録の鍵^{かぎ}をゆだね」られた（教義と聖約27:5）。こうしてモロナイは記録を守る者となり、さらに、記録をこの神権時代に伝える業において主要な役割を果たす人物となった。モロナイは『モルモン書』の中の……ニーファイ人の最後の預言者〔である〕（紀元421年ごろ）。モルモンは死ぬ少し前に、モルモンの版という歴史記録を息子モロナイに渡し（モ言1:1）、モロナイがそのモルモンの版の編さんを終えた。彼は、モルモン書に第8章と第9章を付け加え（モル8:1）、エテル書を要約して版に加え（エテ1:1-2）、さらにモロナイ書という自分自身の記録も付け加えた（モロ1:1-4）。それから、版を封じて、クモラの丘に隠した（モル8:14; モロ10:2）。1823年、モロナイはジョセフ・スミスに『モルモン書』を現すために、復活体となって遣わされた（ジョセフ・スミスー歴史1:30-42, 45; 教義27:5）。モロナイは1823年から1827年にかけて、この若い預言者に毎年教えを受け（ジー歴史1:54）、そしてついに1827年、彼に版を渡したのである（ジー歴史1:59）。ジョセフ・スミスは翻訳を終えた後、その版をモロナイに返した。』（『聖句ガイド』「モロナイ（モルモンの息子）」の項）

モロナイ1:4 モルモン書は大きな価値を持つことになる

• モルモン書は多くの人々の改宗において重要な役割を果たしている。モロナイは特に、末日にモルモン書を通じてレーマン人にもたらされる恵みについて述べている。この神権時代の最も初期に宣教師の召しを受けたオリバー・カウドリとその同僚たちは、昔のアメリカ西部辺境地域（ミズーリ州）に住むレーマン人に教えるように召された（教義と聖約28:

8-10 参照）。今日^{こんにち}、教会は世界中に散っているリーハイの子孫を含むすべての人に福音のメッセージを伝えている。

モロナイ2:1 ニーファイ人の「弟子たち」は使徒であった

• 「この書物〔モルモン書〕はまた、わたしたちに、救い主が復活後にこのアメリカ大陸に御自身を現されたこと……を告げている。また、この地に使徒、預言者、牧者、教師、祝福師がいて、東の大陸^{たまたもの}の民が享受していたのと同じ秩序、同じ神権、同じ儀式、賜物、力、祝福をこの地の民が得ていたことを告げている。」（ジョセフ・スミス、*History of the Church*, 第4巻, 538）

「ニーファイ人の12人はどの場面でも弟子という言葉で呼ばれているが、彼らが自分たちの民の間でキリストの特別な証人となるための権能を神から授けられていたことに変わりはない。したがって彼らは実質的にはニーファイ人の使徒であった。」（ジョセフ・フィールディング・スミス、*Doctrines of Salvation*, 第3巻, 158。モルモン9:18も参照）

モロナイ2-5章 イエス・キリストの教会における儀式の重要さ

• 十二使徒定員会のボイド・K・パッカー会長は、儀式が重要である理由について次のように説明している。「儀式と聖約は、神のみもとに行くための資格証明書になります。ふさわしくなってそれを受けることは、生涯の目標であり、最後までそれを守ることは、この世におけるチャレンジです。」（『聖徒の道』1987年7月号, 25）

パッカー会長はまた次のように説明している。「福音の儀式がなければ、良い行いだけでは罪^{ゆる}の赦しを受けることも、昇栄することもできません。聖約と儀式は絶対に不可欠なのなのです。」（『聖徒の道』1986年1月号, 80-81）

• 十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、天の御父と、わたしたちの家族と、わたしたちが受ける儀式との間に存在する関係について次のように説明している。「末日聖徒の究極的な優先順位には二つの要素があります。第1は、わたしたちと、永遠の父なる神とその御子イエス・キリストに対する関係を理解すること、そして、御二方^{おふたかた}から与えられた救いの儀式を受け、個人的に交わした聖約を守ることによって、御二方との関係を確実なものとするということです。第2は、自分の家族との関係を理解すること、そして、……儀式を受け、……交わす聖約を守ることによって、家族の関係を確かなものにすることです。今、申し上げた方法によって、これらの関係を確実なものとするなら、ほかのいかなる方法でも得られない、永遠の祝福が得られます。科学、成功、財

産、優越感、名声、権力をどれだけ自分のものとしたとしても、この永遠の祝福は得られません。』（『リアホナ』2001年7月号、102）

モロナイ 3 章

モロナイによれば、祭司と教師の職への聖任において
不可欠な事柄は何か。

モロナイ 3:3 「祭司〔または教師〕に」聖任した

・ジョセフ・フィールディング・スミス大管長（1876－1972年）は、ニーファイ人は救い主の訪れを受ける以前はアロン神権を用いていなかったと説明している。ヤコブ 1:18 の注解（110 ページ）を参照する。

モロナイ 3:4 「聖霊の力によって」聖任した

・聖霊はすべての神権の儀式において重要な役割を果たされる。聖霊はわたしたちの心と行いを御存じである。すべての儀式は、聖霊の力によって承認される（教義と聖約 132:7 参照）。預言者ジョセフ・スミス（1805－1844 年）は、儀式の執行における聖霊の役割について次のように語っている。「わたしたちは、使徒の時代と同じように、今も聖霊の賜物を享受していることを信じている。そしてそれ〔聖霊の賜物〕が神権者たちを整え、組織するために必要なものであり、それがなければだれも神権の務めにおけるどのような職にも召されることはない」と信じている。わたしたちはまた、預言、異言、示現、啓示、賜物、癒しを信じており、聖霊の賜物がなければこれらを享受することはできないと信じている。」（*History of the Church*、第 5 巻、27）

モロナイ 4－5 章 聖餐

・十二使徒定員会のデビッド・A・ベドナー長老は、聖約を覚えるために聖餐を受けることの大切さについて次のように語っている。「聖餐の儀式によって、わたしたちはバプテスマの聖約を更新し、罪の赦しを受けて保つことができます（モーサヤ 4:12、26 参照）。さらに、いつも主の御霊を受けられるという約束を毎週思い起こすことができます。そしていつも清く、世の汚れに染まらないでいるよう努めるとき、わたしたちは主の御霊が常



にとどまることのできるふさわしい器となるのです。』（『リアホナ』2006年5月号、31）

モロナイ 4－5 章

パンと水の祈りはどのように似ているか。
また、どのように異なっているか。

モロナイ 4:3 イエス・キリストの御名を受ける

・わたしたちは聖餐の間に救い主の御名を受ける。ダリン・H・オックス長老は、主の御名を受けるときに理解しておくべき 3 つの重要な意味について次のように語っている。

「進んでイエス・キリストの御名を受けることを証明することには幾つかの異なった意味があります。あるものは明白であり、子供でもよく理解できます。しかし中には、聖文を研究し永遠の命の驚異について思い巡らした人でなければ理解できないものもあります。

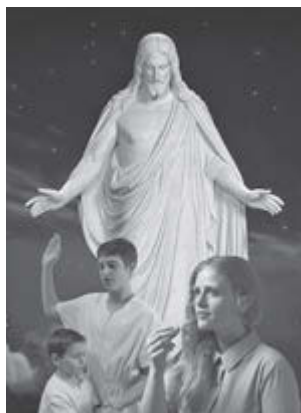
一つの明らかな意味は、バプテスマのときに交わした約束を新たにすることです。聖文にのっとり、バプテスマを受ける人は『自分の……罪を心から悔い改めたことと、最後までイエス・キリストに仕える決心をして進んでイエス・キリストの名を受けることを教会員の前に証明し』ます（教義と聖約 20:37。2 ニーファイ 31:13；モロナイ 6:3 も参照）。聖餐を受けるとき、わたしたちはこの聖約をはじめ、バプテスマの水をくぐるときに交わしたすべての聖約を新たにすることです（ジョセフ・フィールディング・スミス、*Doctrines of Salvation*、ブルース・R・マッコンキー編、全 3 巻〔ソルトレーク・シティ、Bookcraft、1954－1956 年〕、第 2 巻、341－346 参照）。

第 2 の明白な意味は、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になることによって救い主の御名を受けるということです。主の命令により、この教会は主の御名を頂いています（教義と聖約 115:4；3 ニーファイ 27:7－8 参照）。老若を問わず、会員すべてが『神の家族』です（エペソ 2:19）。キリストのまことの信者として、クリスチャンとして、わたしたちは主の御名を喜んで受けています（アルマ 46:15 参照）。ベニヤミン王が民に教えたように、『あなたがたが交わした聖約のために、あなたがたはキリストの子と呼ばれ、キリストの息子および娘と呼ばれる。見よ、それは、今日キリストが霊的にあなたがたを子としてもうけられたからである。』（モーサヤ 5:7。アルマ 5:14；36:23－26 も参照）

またわたしたちは、イエス・キリストに対する信仰を公言するときに、いつでも主の御名を受けます。友人や近所の人、仕事の同僚、それに通る人など、わたしたちには信仰を公言する機会がたくさんあります。……

第3の意味は、キリストに従う者には主に仕える義務があることを十分に理解できる人の心に響くものです。……わたしたちがイエス・キリストの御名を進んで受けることを証明することは、すなわち主の王国の業を進んで行う意志を表すことなのです。

以上3つの比較的明確な意味において、わたしたちは主の御名によってバプテスマを受けるとき、教会員となって主に対する信仰を公言するとき、そして王国の業を行うときに、キリストの御名を受けるといことが分かります。」(『聖徒の道』1985年7月号、81-82参照)



モロナイ4:3;5:2 「いつも御子を覚え」

•大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、人は主を覚えることをどれほど容易に忘れてしまうか、また、もっと頻繁に主を覚えるために何ができるかについて、次のように説明している。

「伝道に出た皆さんは、……家の押し入れにしまい込んでいた伝道中の日記を偶然見つけたことがあるかもしれません。それを読み、当時の自分を思い出して衝撃を受けたことがあるのではないのでしょうか。どれほど熱心に働いていたことでしょうか。救い主について、また自分と自分が会って教えたようにした人々のために主がささげられた犠牲について、どれほど頻繁に考えていたことでしょうか。どれほど熱烈に、また頻繁に祈っていたことでしょうか。そうした衝撃を受けるのは、人生における心配事のために、かつての自分からどれほど懸け離れた状態になっているかに気づくからかもしれません。いつも覚え、いつも祈っている状態にとっても近かった、かつての自分との差に気づくのです。

わたしのメッセージは、嘆願、警告、そして約束です。わたしは皆さんに嘆願します。霊的な成長を促してくれる次のことをどうぞ行ってください。簡単なことです。

まず、主を覚えることです。人は、理解し、愛していることだけを覚えておくことができるものです。救い主はわたしたちに聖文を与えてくださいました。そのために預言者たちが計り知れない犠牲を払っています。主を知ることができる

ように、そうしたのです。聖文を読み、理解することにこれまで以上に集中してください。今決意してください。これまでの人生で、最も多く、最も効果的に読むと。」(“Always,” *Ensign*, 1999年10月号、9-10)

モロナイ6:2 「打ち砕かれた心と悔いる霊」

•「打ち砕かれた心と悔いる霊」を持つとはどういう意味だろうか。エズラ・タフト・ベンソン大管長(1899-1994年)は、それは神の御心に添った悲しみを抱くことと同じであると説明している。すなわち、「それは自分の行いが神に対する背罪であることを深く認識することです。また救い主が最も偉大な御方で、罪とは一切無縁であったにもかかわらず、わたしたちの行いのゆえに苦しみを受けられたということをはっきりと自覚することでもあります。主はわたしたちの罪のゆえにあらゆる毛穴から血を流されたのです。霊的に、また精神的にこのような苦しみを味わうことについて、聖典には、『打ち砕かれた心と悔いる霊』という表現が用いられています(3ニーファイ9:20;モロナイ6:2;教義と聖約20:37;59:8;詩篇34:18;51:17;イザヤ57:15)。このような感情こそが、真の悔い改めへの必要条件なのです。」(「大いなる改心」『聖徒の道』1990年3月号、5)

さらに七十人のブルース・D・ポーター長老は、「打ち砕かれた心と悔いる霊」の意味を明確にして、次のように説明している。

「心が打ち砕かれているとき、人は神の御霊をことごとく受け入れ、自分があらゆる点で神に依存していることを認識します。そのために求められる犠牲は、いかなる形であれ高慢を捨て去ることです。熟練した陶器職人の手にあって、容易に形を変えられる粘土のように、打ち砕かれた心を持つ者は、主の手の中で形造られ、磨かれるのです。……

……打ち砕かれた心と悔いる霊を持った人は、神のおっしゃることであれば何であれ、抵抗せず、怒ることなく、喜んで行います。自分の方法で行うのをやめ、神の方法で行うようになります。……

打ち砕かれた心には、キリストがわたしたちのために受けてくださった苦しみに対する深い感謝の念を持つというもう一つの特徴があります。……救い主とその苦しみを思い出すとき、わたしたちの心も、油注がれた者への感謝で打ち砕かれるのです。

自分が持っているものすべて、そして、今の自分自身のすべてを主に犠牲としてささげるとき、主はわたしたちの心を平安で満たしてください。『心のいためる者をいやし』てください(イザヤ61:1)、……神の愛をもってわたしたちを祝福してください。」(『リアホナ』2007年11月号、32)

モロナイ 6:3 「仕える決心」

・トーマス・S・モンソン大管長は、バプテスマを受けて教会での奉仕に召されるときにわたしたち全員が持たなければ



ならない態度について次のように語っている。「昇栄は個人の問題で、人はグループとしてではなく、確かに個人として救われます。しかし、人は真空の中では生きていけません。教会の会員は、奉仕するという決意が求められます。重要とは思えない責任や、報いのよく分からない責任もある

かもしれません。救い主に受け入れられる奉仕には、喜んで事に当たる精神と、いつでも差し伸べることのできる手と、決意に満ちた心が必要です。』（『聖徒の道』1994年7月号、64）

モロナイ 6:4 「神の善い言葉で養われ」

・働きかけを受けるとは影響を受けることである。モロナイ 6:4 の「働いて」という言葉は象徴的な意味で用いられており、御霊の働きかけを受けて改宗者がたどる変化を示している。わたしたちの罪が赦されるのはキリストの贖いの犠牲によるが、実際に罪が清められ、取り除かれるのは、火のバプテスマ、すなわち聖霊の清めの力によるのである（2ニーファイ 31:17；アルマ 13:12；3ニーファイ 27:20 参照）。また、忠実な末日聖徒になれるように助けてくれる、すべてを可能にする贖罪の力もまた、聖霊の働きによって得られる。

・ゴードン・B・ヒンクレー大管長（1910－2008年）は、ある個人的な経験について語り、新たに改宗した人々の世話をすることがどれほど大切かを示している。

「すべての改宗者は『神の善い言葉で養われ』なければなりません（モロナイ 6:4）。改宗者にとって欠かせないのは、神権定員会や扶助協会、若い女性、若い男性、日曜学校、あるいは初等協会などに参加することです。また、聖餐会に出席して聖餐を取り、バプテスマのときに交わした聖約を新たにしよう励ましを受けなければなりません。

最近わたしは、ある夫婦の話を自分の所属するワードで聞く機会がありました。男性の方はというと、ビショップの責任も含め、教会の中でいろいろな責任を果たしてきた人でした。この夫婦に与えられたいちばん最近の責任は、夫のいない女性とその子供たちのフェローシップをするという責任でした。その責任はそれまでに受けた教会の責任の中で最

も楽しい責任だ、とこの男性は語っていました。

この若い母親は多くの疑問を抱えていました。そして恐れと不安に満ちていました。失敗したり、的外れな発言をして恥ずかしい思いをしたり、人から笑われたりするのをとても恐れていました。この夫婦は、忍耐強くその母親とその子供たちを教会に連れて来ては、一緒に座り、彼らが恥ずかしい思いをしないように見守りました。まるで護衛のようでした。そしてこの夫婦は1週間に1度、夕方に彼らの家を訪問し、さらに福音について教えたり、彼らの様々な質問に答えたりしました。まるで羊飼いが羊を導くように、この夫婦はその小さな家族を導いたのです。後にこの家族が事情により別の市へと引っ越すことになったとき、兄弟はこのように言いました。『わたしたちは今でもこの女性と連絡を取り合っています。わたしたち夫婦は彼女に深く感謝しています。彼女はようやく教会に落ち着いてきましたので、もう不安はありません。彼女とかかわれたことは、実にすばらしい喜びでした。』

もしわたしたちが教会に入ってくる人たちにもっと関心を向けるなら、去って行く人はごくわずかしかない、とわたしは確信しています。』（『子羊を見いだし、羊を養う』『リアホナ』1999年7月号、125－126 参照）

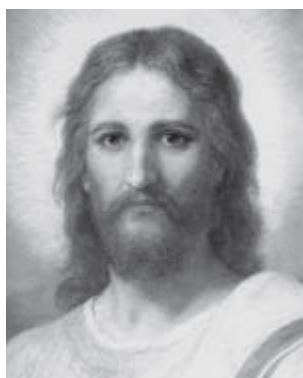
・十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、仲間である会員たちが「正しい道に」とどまるようにする責任をすべての人が負っていると述べている。「家庭と教会での靈感に満たされた教育は、神の善い言葉による養いというきわめて重要な要素を満たす助けとなります。……確かに、この召しを導んで大いなるものとする機会に至る所に存在します。それは永遠にわたり必要とされます。父、母、兄妹、友人、宣教師、ホームティーチャー、訪問教師、神権指導者、補助組織指導者、クラスの教師といった人々はそれぞれ自らの道を歩みつつ、わたしたちを教え、救いに導くために『神から来た』のです。実際教会内で、周囲に影響を与えていない人を探すのは不可能です。』（『聖徒の道』1998年7月号、28）

モロナイ 6:4 「信仰の創始者であり完成者」

・英語の“author”（「創始者」）という言葉は、「作り出す、生み出す、または生じさせる人」と定義されている（Noah Webster's First Edition of an American Dictionary of the English Language, 1828〔1967年〕）。墮落した状態にあるわたしたちは、信仰を得てはぐくむことにおいて救い主に頼らなければならない。したがって、信仰箇条の第4条には、福音の第一の原則は「主イエス・キリストを信じる信仰」であると明記されている。

英語の“finisher”（「完成者」）という言葉には、わたしたちが信仰をはぐくむ過程において救い主が果たしてくださる役割に当てはまる幾つかの意味がある。まず、「やり終える人、完全に遂行する人。」主のようになろうと努力し続けるとき、わたしたちは主が御自分の役割を完全に遂行してくださると信じることができる。次に、「完全にする、または完成させる人。」（*Noah Webster's First Edition*）聖約を守ろうと最善を尽くすとき、わたしたちは主の恵みによって、信仰の旅における最終目標である完全な状態に最終的に達することができる。“finish”という言葉には、「意図する、優れた状態になるまで磨き上げる」という意味がある（*Noah Webster's First Edition*）。主の息子や娘として信仰をもって主のもとに行くとき、主はわたしたちが最高の自分になれるように助けてくださる。

• ヘンリー・B・アイリング管長は、わたしたちの贖いにおいて主が果たされる中心的な役割について語っている。モロ



ナイの言葉に自らの証を付け加え、アイリング管長は次のように述べている。「『イエスは』『彼らの信仰の創始者であり完成者……』〔です〕（モロナイ6:4）。主御自身の贖罪により、またわたしたちが主の戒めに従うことを通して、わたしたちが清められるのは救い主のおかげです。また、信仰をもってバプテスマの水

に入り、聖霊の賜物を受ける人々を養ってくださるのは救い主です。彼らがいつも主を覚え、幼子のような従順を示し続けるならば、常に主の御霊を受けられるのは救い主のおかげです。』（『聖徒の道』1998年1月号、98）

モロナイ6:5 しばしば集まる

• 十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老（1917－2008年）は、世界中の教会で見られる会員たちの交わりについて語り、しばしば集まるようにという重要な命令を実行するために教会員が払っている犠牲について次のように述べている。

「教会の会員が受ける多くの祝福の一つは、聖徒との交わりです。わたしはヨーロッパでの責任を受けていたときに、ドイツの軍人ステークで忘れられない大会に出席しました。多くの忠実な兄弟姉妹は、集会に出席するために、何時間ものかけて数百マイルを運転して来ました。大勢の人が大会前夜に到着し、体育館の床で眠りました。いかなる犠牲を払おうとも、彼らは末日聖徒の交わりと、教会指導者からの教

えや霊的高揚を求めて、喜んでやって来たのです。そこに集まった人々は、『もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族』でした〔エペソ2:19〕。

わたしたちは『断食し、祈るため、また人の幸いについて互いに語り合うためにしばしば集まる』という戒めと祝福を受けています〔モロナイ6:5〕。総大会や世界中で行われる教会の他の集会で、わたしたちは福音における兄弟姉妹とのすばらしい交わりや、神の御霊のもたらす慰めを求めてともに集まります。そして、礼拝行事で御霊を感じて、神への愛と同胞への愛で心が満たされるのです。』（『聖徒の道』1998年1月号、37）

モロナイ6:7 「自分たちの中に決して罪悪があってはならない」

• ベニヤミン王は、人の名が消されるのは戒めに背いた場合だけであると説明した（モーサヤ1:12参照）。アルマは、悪人の名が「わたしの民の名とともに並べられることはない」と警告した（アルマ5:57）。深刻な罪悪を犯す人はそれぞれ悔い改めなければならず、悔い改めない人は主の臨在を受けるのに、または王国の一員であるのにふさわしくないとされる時が来る。悔い改めない会員は、教会の宗紀上の処分により会員資格を失うことがある（教会宗紀が必要となる罪について、詳しくはモーサヤ26:32－36の注解（156－157ページ）を参照）。

モロナイ6:7－8

モルモン書の時代、教会宗紀はどのような方法で行われていたか。

モロナイ6:9 「御霊の働くまに」

• 十二使徒定員会のデビッド・B・ヘイト長老（1906－2004年）は、教会の集会において御霊を祈り求めることの大切さについて次のように語っている。

「モルモンがモルモン書に記録しているように、ニーファイ人の衰退期における類のない悲劇は、聖霊と霊的な賜物を失ったことでした。知恵と靈感により、モロナイは最後の記録に父モルモンの教えと、数々の儀式と聖餐と教会の慣例についての記述を含めました。注目すべきは、彼らの集会についての次の証です。

『教会員の集会は、御霊の働くまに、聖霊の力によって教会員が指導した。教えを説くことも、勧めることも、祈るこ

とも、請い願うことも、歌うことも、聖霊の力によって導かれるままに行われた。』(モロナイ 6:9)

わたしたちはこの聖句にあるような精神を持って礼拝し、聖餐会を開くことができます。また、そのような集会を開かなければなりません。

ある霊的な集会が終わった後で、一人の姉妹がわたしにこう言いました。『聖餐会で話されたことを全部覚えているわけではありませんが、閉会の賛美歌を歌い、頭を下げてお祈りをしたときの気持ちだけは記憶しています。』(「主の聖餐を理解する」『聖徒の道』1989 年 3 月号, 14 参照)

理解を深めるために

- あなたは自分が神と交わしている聖約についてどれほど頻繁に考えているだろうか。どの聖約について頻繁に思い起こしているだろうか。すべての聖約を頻繁に思い起こすべきなのはなぜだろうか。

- 教会員がしばしば集まるように命じられているのはなぜだろうか。しばしば集まることによってあなたやほかの人々にどのような祝福がもたらされるだろうか。
- 集会を御霊の働くままに指導することが重要なのはなぜだろうか。

割り当ての提案

- 聖餐のパンの祈りを読み、次に水の祈りを読む(モロナイ 4-5 章参照)。読みながら、わたしたちやすべての人々をわたしに置き換え、自分自身についての祈りとする。こうすることで自分にとって聖餐の祈りの持つ意味がどのように変わるかを考える。
- 本章の聖句ブロックの中で、イエス・キリストの名を受け、主を覚えるようにとモロナイが何度勧めているかについて考える。自分の生活を救い主に近づける方法を幾つか日記に記録する。